

# 道 德 的 美

深 田 康 算

シルラーは「典雅と莊重」*Über Anmut und Würde* (一七九三年)に於てカントの嚴肅主義に對し略ぼ次の様な批評を下して居る。

「私はカントと共に、傾向性 *Neigung* の或一つの自由的行爲への關與は、此行爲の純粹的義務性若しくは道德的價值に對しては何物をも加へぬことを確認する。併し、恰もこの事からして私は、人間の道德上の完全は實に彼れの道德的行爲に彼れの傾向性が關與する時に於てのみ見られ得るのであると云ふ斷案を下したい。蓋し人間の本務は個々の道德的行爲を遂行することに在るのでなくして、彼れが一個の道德的存在者たることに在る。諸德行がではなく、一徳性が彼れの規範なのである。さうして、徳性とは義務への傾向性 *eine Neigung zu der Pflicht* より他の何物でもない。其れ故に、傾向性からの行爲と義務からの行爲とは、客觀的には假令甚だしく相反せるものたるにせよ、主觀的には決してさうでない。従つて、人間は快感と義務とを結び

付けることを、してもよいのではなくして、せねばならぬのである。彼は彼れの理性に悦びを以て従はなくてはならぬのである。感性は、重荷の如くに其れを投げ捨てるため又は粗らき外皮の如くに其れを脱ぎ捨て、捨てるためにではなく、其れを最も緊密に彼れのより高き自己と協和せしめるために、人間の純粹精神性に配與せられてゐる。理性と感性とを兼ね有する存在者として人間を造つたことそのことに依つて自然は己に明らかに人間に向つて、自然に對する彼れの義務として、自然の結び合せた所のものを彼れが引き離さぬこと、彼れの神的部分の純粹なる發現に於てさへ感性的部分を忘却せぬこと、其一方の勝利を其他方の壓倒の上に基けぬことが課せられてゐることを布告してゐる。道德的意思 *sittliche Dankart* は、それが其人の全人間性から、此二つの原理の協和的結果として湧き出づるものとなつた時、即ちそれが其人の性自然となつた時、始めて大磐石の上に立つのである。何故ならば道德的精神が苟くも尙威力を振ひつゝあるのは、自然的本能が尙未だ之れに對抗する力を有つてゐるからなのでなければならぬ。打ち倒されたに過ぎない所の敵は再び立ち上がり得る、併し和解せられたる敵こそは本當に打勝たれたのである。

「カントの道德哲學に於て、義務の理念は、確かに總てのグラーチエ達 *Grazien* を戰

き退かしめるに足る程の、さうして弱き頭腦の所有者達をして道德の完全を陰鬱なる禁欲主義に縁りて求むるの誤謬に陥らしめ易い程の、硬さと冷かさを以て説示せられてゐる。勿論カントは自己の道德が此の如き主義―それは彼自らの快活にして自由なる精神には實にあらゆる主義の中最も擯斥すべきものとして映じたに相違ない―の上に立つものと誤解せられることに對して辯解に力めてはゐる。併し、人間の意志の上に働く彼の二つの原理 極端に相對抗するものと見做してゐる點に於て、彼自身己に此の如き誤解を誘致するに有力なる導因を―彼れの企圖の上からしてそは恐らく到底避け得ぬことではあるが―與へてゐるのである」

斯くしてシルラーは、一方に於ては、カント「理性的道德説に對しては全く議論の餘地のないことを承認し、此學説の見地を捨てなければならぬとならば寧ろ余は全人間性の要求を捨て、顧みぬであらうと云ひ、他方に於ては、カントの嚴肅主義を以て其時代の道德説に現はれてゐる諸傾向に對する矯正の企圖から出たものであると見做してゐる。彼れの意は蓋し學説そのものと其れの論述の形式とを區別することに依つてカントを救はうとするに在る。彼に從へば、本來嚴肅主義を高唱すべきではなく寧ろ「美しき魂」schöne Seele を提唱すべきであつたカントが、自由主義者

Lati udinarior を惡むことの甚だしき結果、嚴肅主義者 Rigoristkn の群に投じたのは、彼れの學說そのものゝ上に於ては、唯其說述の形式の上に於てはあり、彼自らの罪ではなくして、彼れの時勢の罪である。「カントが彼れの時代のドラコーとなつたのは、彼れの時代は尙ソロンを受け容れるのに力もなく又價せぬと彼れが考へたからであつた」。

「併しながら如何なる罪過の故に家の子供達は顧みられずして、唯奴婢等のことをカントは心に懸けたのであるか」。不純なる傾向性が屢道德の名を篡奪したことの故に、氣高き胸に燃える私なき熱情が嫌疑を蒙らなければならぬ謂はれない。自然主義や本能主義やが屢あまりに放縱なる、あまりに自由なる形を道德法に與へるからと云つて、道德法を極めて苛酷なる形に狭ばめ、自由自發なるべき道德的境地を變形して何等の自由をも何等の自發をも許されぬ所の奴隸の境涯に等しきものと爲すべき理由はない。さう考へたシルラーは、恰もヴォーヴナルグが「私の悦んで行ふ所の善は善たる性質を變ずるのか、善ではなくなるのか」と云つてゐるのと同じ思想から、さうして同じ情熱を以て、道德法の命令的なる形そのものが、已に寧ろ人間の威嚴を傷けること、—理性と感性と、道德と自然と、意志と感情とが切り離されぬもの

なること、――を論じてゐる。さうして、此の如き一致――「美しき魂」――に於て道德の極致を認めてゐる。

「美しき魂」とは、道德的感情が遂に感情の全領域を完全に己れの味方とした極、安んじて意志の指導をば動くまゝなる情緒に任せ得る、さうしてこれが爲めに意志の命令と矛盾する如き危険さへも全く無い程度に達したものを云ふ。さうであるからして、美しき魂に於ては、個々の行爲は實は道德的でない、全性格が道德的なのである。又美しき魂の個々の行爲の一つでも、彼れの功績てがらとして數へらるべきものはない。何故ならば、本能の満足は決して功績とは云はれぬからである。美しき魂は其れがある、と云ふこと以外に何等の功績を有もたない」

典雅は、莊重が崇高なる心意の表現である如く、美しき魂の表現である。さうして莊重には「畏敬」の情が必ず伴ふ如く、典雅には「愛」の情が必ず伴ふ。

カントの嚴肅主義に對するシルラーの此批評は、一方から見れば――彼れが其一年後一七九四年六月十三日にカントに贈つた書翰の中に「私は暫らく貴下の反對者たる外觀を粧はなければならなかつたのです」と云つてゐること丈けからしても已に

明らかであるやうに、全然カントに反對する立場に立つものではない。併し又それと同時に、他方から見れば、カントの之に對して與へた辯明 (Die Religion imre halb der Grenze der blossen Vernunft, 2. Auflage, Reclamausgabe, S. 21-22, Anmerkung) に依つて、シルラーの此批評——若くは其立場——が全く打ち鎮められたと云ふことも出來ない。

シルラーがカントの嚴肅主義を非難するのは、カントが義務に對して唯畏敬 (Achtung) の情のみを許すに止まるのを飽足らずとして、寧ろ吾々が愛 (Liebe) を以て義務を遂行し得る境地を徳性の極致と考へるのである。併し、愛を以て義務を遂行するは徳性の此極致義務は傾向性からして自からに行はれ、意志が感情の指導に全然己れを任かせ得るに至れる境地として、それは理性と感性、義務と傾向性、意志と感情若くは道徳と本能との協和たる「美しき魂」であるとせられる時、道德法の純粹性——嚴肅主義とは斯かる純粹性より他の何物でもないのであるからして——は失はれて了うと云ふ危険に陥らなければならない。さうであるからして一方に於て、道德法の純粹性の飽くまでも確保せられなければならないこと、さうしてそれは唯カントに依りて確立された方法論的意義に於ける嚴肅主義の力に基いてのみ可能であることを何處までも承認して、其點に於てカントの理性的道德說に對して議論の餘地は全

くないと言つてゐるシルラーが、他方に於て、道德法の實現に傾向性の關與すべきことを要求するのは、それは唯義務の遂行に伴ふ結果として吾々の本能が道德法に對して漸次的に屈服するに至ると云ふを意味するだけであつて、義務への傾向性が生れ出づると云ふことを意味し得ない。道德法の純粹性の上から云へば、義務への傾向性とは自己矛盾に外ならないからである。シルラーの「美しき魂」は「義務への傾向性」として標榜せられてゐる限り、さうしてそれが道德の領域に於て打立て得らるべきものとせられてゐる限り、それは規律なき本能の浪漫主義、感情的爛醉とさうして自然主義的自己盡生とを以て道德法の嚴肅主義に代へようとする誤謬である。斯かる一面がシルラーの云ひ現はしの中に見出されることは否定が出来ない。例へば「階級の差異」 *Unterschied der Stände* と題する二行詩に於て「貴族は道德界にもある。平民的なる人々は彼等が爲す所のものを以て責を果たし、貴族的なるものは彼等がある。所のものを以てする」と云ふのや、又「良心の躊躇」 *Gewissenskrüppel* に於て「友人に對する義務の遂行に當つて吾々が友人を愛するの情を有たぬわけに行かぬ故に、其遂行は道德的たり得ないであらうと疑ひ、その「解決」 *Entscheidung* に於て、然らば吾々は先づ友人を輕蔑し、憎惡を以て義務の命令を遂行すべし、それが道德的たり得る唯一

の途であると云ふ如きは、其最も著しき例である。爲すことを單なる外的行爲と見あ、ることを心術の意味に解するならば、階級の差異は道德界にも認められる。併し、道德的には人は彼れの義務を遂行することより以外の何物をも爲しえぬと云ふカントの意味に於て云へば、道德界に於ては人は總て彼れの爲す、所のものを以て責を果たさなければならぬ。其所には單に彼がある、所のものを以て坐食する所の貴族は許されぬであらう。「良心の躊躇」と「解決」とに至つては、其詩句が有名である、丈けそれ丈け、私はそれが極めて粗野な、私の云ふのは固より其内容たる思想に就ては、あるが、―ものたることを指摘して置きたい。此思想はカントの嚴肅主義に對する正當なる非難をも、又シルラー彼自身の見地をも含んでゐるものではない。唯偶々カント學説のカリカチュールのカリカチュールとも云ふべきものたるに過ぎない。併し其等がシルラーの眞意を傳へてゐるものでないことは、典雅と莊重に於て「美しき魂」が吾々の自然ではなく、單なる理念であると言明せられてゐることに於て己に明らかであらう。(典雅と莊重の中莊重を論じてゐる部公の最初の頁參照)。

さうならば「美しき魂」の主張、美的道德の主張は、唯義務の遂行に伴ふ結果として本能が道德法に對して漸次的に屈服するに至ること、云はゞ徳性の涵養の最高段階で



あることを意味するのに止まるであらうか。若しさうであるとするならば、此主張は嚴肅主義に對する何等の非難を舍むものでもなく、況んや其れの反對ではあり得ない。其點に於て、シルラー批評に答へたカントの辯明は妥當であり又十分である。と云はなければならぬ。カントは云ふ「義務概念は莊重であるからして、之れに典雅を配件せしめることは、恰もそれがために、ごうしても出來ないと私は考へる。何故ならば、義務概念には、典雅とは正しき矛盾に立つ所の無條件的強制が含まれてゐるからである。法の威嚴は、人をして戦き退かしめる敬遠 *Scheu* ではなく、又それは人を馴れ近づかしめる優雅 *Reiz* でもなくして、恰もシナイ山上に於て神から與へられた法がさうであつた如くに、人に畏怖の念 *Einfurcht* を起さしめる。此畏怖の念が命令者に對する臣下の畏敬 *Achtung* を喚び起さしめるのであるが、併し、今此場合に於ては、命令者が吾々自身の中に在るのであるからして、それは吾々の中に吾々自らの本質に對する崇高の感情 *Gefühl des Ehrhabenen* — それはあらゆる美にも優して吾々を動かす力を有する所のものであるが — を喚び起すのである。 — 併し、徳性、即ち自己の義務を嚴密に遂行せんとする鞏固なる心術に至つては、それは其結果に於ては又福祉を、此世に於て自然若しくは藝術が成し遂げ得る總てのものよりもより以上に齎ら

すもの、*Wohlthätig*なのである。さうして此形に於て見られた時、人性の立派なる姿にはグラーチエ達の随伴し來ることが許される。唯併しそれとても義務に就てのみ語らるゝ折には彼等は謹みて其席から遠慮しなければならぬ。併し、徳性が若し到る所に浸徹し盡した場合に於て、其れが此世の中に振り蒔くであらう所の典雅なる結果に就て見るならば、道德的理性は其場合には感性をして想像力を通して協働に與からしめてゐると云へる。怪物を克服する事業が成し遂げられた後に於てのみヘラクレスは始めてムーゼ達の導師、*Musaget*となる。彼れの事業そのものゝ前には彼等ムーゼ達は唯恐れ戦くばかりなのである。ゼヌス・ウラニア *Venus Urania*の侍女たる彼等が、若し敢えて義務規定の事業に關與し、彼等自ら義務への動機たらんと欲するならば、彼等は忽ちにしてゼヌス・ヂオネ *Venus Dione*の配下たる妓女となるであらう。――尙又、道德的人格の感性的性質、云はゞ徳性の氣質、*Temperament der Tugend*が如何なるものであるか、そは進取的であるか、即ち勇躍的、*föhlich*であるか、或は又、戦々の競々のであるかと云ふ點に至つては固より答へる迄もないことである。後者の如き奴隸的心情は、畢竟道德法に對する隠れたる憎惡の心なしには有り得ない。義務の單なる承認に於ては、はなく、遵奉に於て、勇躍の心を持してゐると云ふこ

とは、其道德的藝術の醇正なることの證左である」

併しシルラーがグラマーチエ達の爲め、ムーゼ達の爲め、換言すれば感性と本能と自然との爲めに、要求してゐる所の地位は、明らかに決して斯くの如きものでない少くとも斯くの如きものに止まらない。寧ろ莊重に結び附く所の畏敬よりも典雅に結び附く所の愛に於て徳性の極致を見るのである。ヘラクレスの事業そのものにムーゼ達をして關與せしめようとするのである。傾向性と云ひ感性と云ひ、自然と云ふものに、向つて義務規定の原理たる地位を要求するのである。其點から云へば、シルラーは、感性に向つて若しくは傾向性に向つて、理性的道德説の嚴肅主義の上からは到底許され得ざる權利を附與しようとするのである。併しながら、シルラーは、典雅に結び附く所の愛に於て徳性の完全、若しくは極致を見るに止まるのであつて、感性や傾向性や本能やの自らなる活動を以て直ちに道徳であると思見做してゐるのではない。彼の「美しき魂」は「屢美的道徳」を説くものとせられ、浪漫主義や自然主義やに都合よき云ひ前を興へたとも云はれてゐる。此誤解は併し彼の云ふ所の典雅と愛とが徳性の極致であること、換言すれば、彼の意味する所のものが美的道徳ではなくして、實に道德的美であること云ふことに依りて解かれなければならぬ。蓋しシル

ラーの「美しき魂」の説が、實はカントの嚴肅主義に對する批評若しくは非難であり得ぬのに拘はらず、而かも又カントの辯明に依りて彼れの批評若しくは非難が全くは打ち鎮められ得ぬ所以は、吾々の見る所に從へば「美しき魂」が道德的概念ではなくして美的概念であるのに基いてゐる。「美。的。道。徳。」としての「美しき魂」は、義務への傾向性を説くものとして自己矛盾であると共に、それは傾向性によりて義務を濁らすものとして道德法の純粹性を破却するものでなければならぬ。之れに反して「道。徳。的。美。」としての「美しき魂」は道德的心術の感性に於ける現はれとして、純粹精神の官覺的顯現として、其處には道德法と共に傾向性の關與が承認され、精神と共に感性の原理が確立されなければならぬ。善の範疇は意思に妥當し、美の範疇は感情に妥當するからである。さうして意志と感情との協和たる「美しき魂」は、善の美なるものとして、道德的美として、美の制約に從はなければならぬからである。斯くして始めて道德的には飽くまでも排除されなければならぬ所の傾向性は感性(若しくは感情)として、而かも感性の極致として美の領域に於て復活し得る。

シルラーの「美しき魂」は、上のやうに考へて來るならば、始めて其意義に極めて深いものゝあることを理解し得るであらう。斯く解することの外に、此「美しき魂」の價

値の認められ得る途はないであらうと思はれる。(ヘルマン・コーヘン「カントに依りて與へられた美學の基礎附け」及びカール・フォン・アレンダー「カント、シルラー、ゲーテ」  
 H. Cohen, *Kants Begründung der Aesthetik*, 1889; K. Vorländer, *Kant Schiller Goethe*, 1907 参照)  
 一言にして云へば、シルラーの「美しき魂」は嚴肅主義に對する非難ではなく、嚴肅的  
 徳を超越して所謂「美的」道徳の見地を立てたものではなくして、寧ろ道徳的  
 美の概念を美の中に確立したことに依りて美の領域を遙かに擴大したものと、且又其所  
 からして美の概念の純粹性を善の概念に對して確立したものと見るべきであらう。さう  
 して、カントに對してシルラーが正當に批評し非難し、若しくは訂正し、超越し得た所  
 のものは、道徳學の範圍に於ては、實は美學の領域に於ては、あつたと云ふべきで  
 あらう。此事は、「典雅と莊重」の検査に依つて、如上の如く、吾々の畧到達し得る結果であ  
 るが、シルラー自身が「人間美育論」(一七九四年)「Über die ästhetische Erziehung des Menschen,  
 23. Brief, Anmerkung」の一つの注目すべき脚註に於て述べてゐる所からして、此事は十  
 分確實に裏書せられてゐると考へられる。其第二十三書翰の脚註に於て彼れは次  
 のやうに述べてゐるのである。

「道徳哲學者(カントを指すのであることは云ふまでもない)は吾々に教へて、人は

彼れの義務を行ふことより、以上何事をも爲すことは出来ないと云ふ。さうして彼れの云ふ所は、行爲が道徳法に對して有する所の關係のみを意味してゐる限り、完全に正當である。併しながら、單に或目的に關係を有する丈けである所の行爲に於て、此行爲が其目的を越えて其以上尙超感覺的なるものへ向ふ――と云ふのは、此所では別の事ではない、物理的自然的なるものを美的に遂行すると云ふに他ならないが――と云ふことは、これは正さしく、同時に其義務を行ふことより以上の事を爲すものと認めなければなるまい。義務の命じ得る所のものは唯意志が神聖であれと云ふに止まる、尙其上自然もが又已に神聖化せられたるものであれとは、命じ得ないからである。さうであるからして、義務を道徳的に超越することは、如何にも出来ないけれども、美的に之れを超越することはあり得る。 *Es giebt also zwar kein morales, aber es giebt ein aesthetisches Ubertreffen der Pflicht.* さうしてさうした行動を氣品ありと云ふのである。氣品あるものには、併し、餘分なるものが認められる。實質的なる價值のみがあればそれで十分であるのに、自由なる形式的なる價值さへをも有してゐる、若しくは、其れが持つてゐなければならぬ所の内的價值の上に、尙欠いても差支のなかつた所の外的價值をさへも包有してゐる。恰もその故に、此美的餘剰と道徳的の其

れを混同し、氣品ある者の現象に惑はされて、氣儘と偶然とを道德そのものゝ中に導き入れようとする者をも生じた。併しそれは云ふ迄もなく道德の全然たる破棄と云はなければならぬ」

而して「美しき魂」に依りてシルラーが美學の上に齎らし來つた効績は、實に、カントに於ては單に *implicit* に含まれてゐたに止まる所のものゝ徹底的組織立てよりより少きものではなかつたと云へる。